國學院大學学術情報リポジトリ

〔談話室〕世界でいちばん格好いい文学博士

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 千葉, 聡, Chiba, Satoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000283

世界でいちばん格好いい文学博士

千葉　聡

ずっと國學院大學に憧れていた。釈迢空のいた國學院で、大好きな文学を深く学びたいと思っていた。東京学芸大学を卒業し、三年間夢中で働き、学費の目途がたったので、國學院大學大学院を受験した。なんとか受かった。

「千葉君は、教育学部から来たから、文学研究の基本がわかっていないね」

当時の文学研究科には、新聞や雑誌を賑わすスター教授が多かった。ただ一人、味方になってくださったのが、沖縄学の外間守善先生だった。

「小難しい理屈ばっかり並べたって、それで文学研究が進む訳じゃない。今日はもう、おやつにしよう」

最初の授業で、外間先生は草餅を買って来てくださった。本を開いて二十分ほど議論をしたら、あとはおやつタイム。草餅はおいしく、先生がお話しくださる世界各地での冒険談は面白く、私たちは何度も大爆笑した。

外間先生は、剛柔流空手八段の名人。野球と陸上で国体に出場なさったこともある。ロマンスグレーの髪、いたずらっ子のように輝く瞳。お声は朗々と響きわたり、文学だけでなく、音楽も美術も、政治も国際情勢も、すべてを題材にしてお話しくださる。とにかく外間先生は格好良かった。先生の追っかけをする女子学生も少なくなかった。

先生は、学生が自由に意見を述べることを好まれた。学生の意見を否定したりなさらず、どんな言葉にも「うん」「なるほど」「面白い」とうなずいてくださった。うなずいたあとで、とっておきの深いご指摘をくださった。

「このことについては、千葉君、どう思う？」

大学院生の中で、いちばん背が低く、弱々しかったのは私だった。外間先生は、そんな弱い千葉に目をかけてくださっ

た。おやつタイム中に、私は何度も意見を求められ、なんとかお答えしているうちに、議論そのものが楽しくなってきた。不思議なことに、外間先生との議論を通じて、受講生たちはみな、逞しくなっていった。議論の内容は、文学に限ったものではなかったのに、いつのまにか一人ひとりが自分の課題を見つけ、研究のヒントをつかんでいったのだ。

やがて外間先生は大学を離れられ、本郷の角川ビルの中に「沖縄学研究所」を開設された。國學院の大学院からは、佐藤公祥君と私が呼ばれ、先生の助手を務めることになった。平成八年、外間先生が『南島文学論』により角川源義賞を受賞なさると、新聞や雑誌の記者が先生を取り囲み、東京でも那覇でも祝賀会が開かれた。

「外間さん、あんたの言ってることはデタラメだ。デタラメだと認めろ！」

外間先生の成功を妬んだのだろうか、酔っぱらった男が、那覇の祝賀会に乗り込んできたことがあった。周囲はざわつき、佐藤君と私は先生のもとに駆けつけた。だが、先生は開いた右手を男に突き出し、低い声でおっしゃった。

「どうかされましたか。何かあったのなら、いくらでもお話をうかがいましょう」

男は肩を落として泣きだし、愚痴をこぼして立ち去った。外間先生は、ただうなずいて聞いていらっしゃった。

祝賀会から数か月がたち、穏やかな日々が戻ったころ、外間先生は私に「芥川賞を取れ」とおっしゃった。

「千葉君はまだ若いが、君には、君にしかない、いいところがある。それを書いてごらん」

私は誰にも内緒で、文芸誌の小説新人賞にたびたび応募していた。外間先生は見抜いていらっしゃったのだ。

小説ではなかったが、平成十年、私は短歌研究新人賞を受賞した。外間先生はたいへん喜んでくださったが、それでも「次は芥川賞だ」とおっしゃった。やがて私も、雑誌や新聞に、短歌やエッセイを書くようになった。歌集もエッセイ集も刊行し、外間先生にお届けした。先生はやはり「次は芥川賞だ」とおっしゃった。

外間先生が亡くなってからも、たびたび先生を思い出す。ヒルトンの『チップス先生』も、魯迅の『藤野先生』も、それなりに格好良かったが、外間先生はもっと格好良かった。そして、教師の仕事に疲れ、夜中の原稿書きに行き詰まると、必ず外間先生の「次は芥川賞だ」という声が聞こえてくるのだ。

（国語科教育法）